

見わたすかぎり 美しい穏やかな海が 広がっていました

察レポート

in 北海道奥尻郡奥尻町

10月3日～4日



10月3日、1泊2日の日程で、地震・津波の被害を受けた北海道離島の奥尻島へ被害状況及びその後の復旧・復興状況の視察に行ってきました。

奥尻島の視察

総務経済委員長

鈴木義男

奥尻島（奥尻町）の概要
面積 143平方キロメートル

東西11キロメートル
南北27キロメートル
周囲84キロメートル
人口3、136名
世帯数1、617世帯
（平成24年現在）

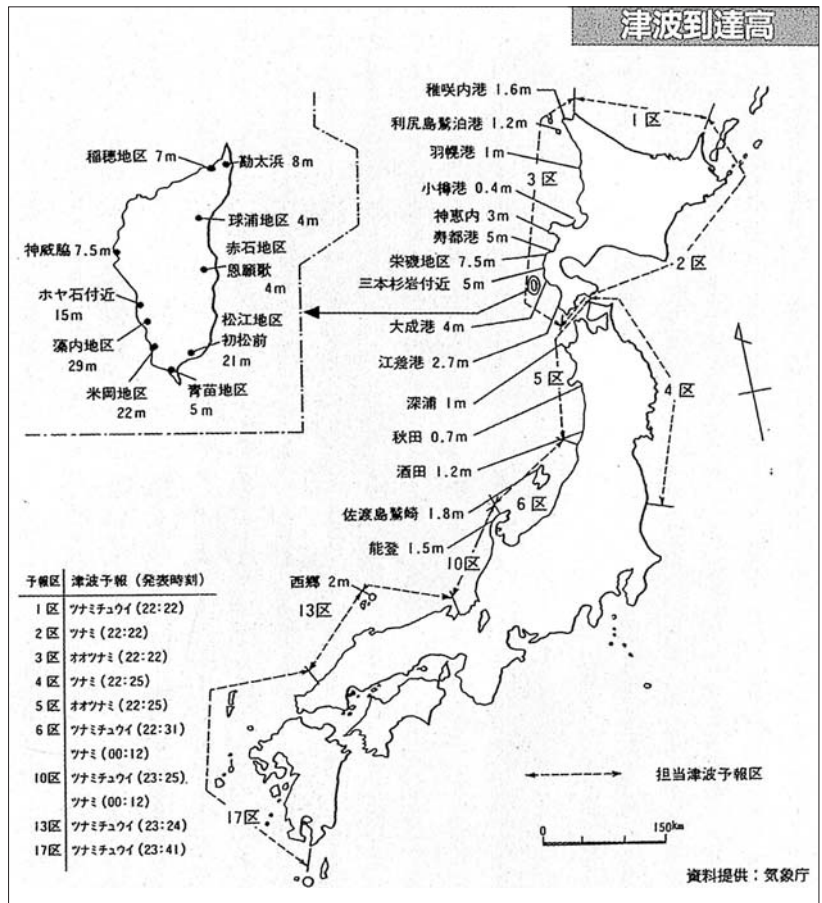
北海道南西沖地震

一、地震の概要

平成5年7月12日午後10時17分発生
震源の深さ34キロメートル

震度6の烈震（推定）
マグニチュード7.8

この地震で地殻変動による地割れや陥没、建物の倒壊、液状化現象による



る田畑や道路など各地区で大きな物的被害をもたらした。

二、津波の概要

震源に近い奥尻島では、地震発生から3分後には津波によるものとした。津波の来襲で、家や集落が一瞬のうちに壊滅し、人的被害のほとんどはこの津波によるものでした。津波到達の図を見てください。津波の高さは地形により、地域によって大きな差があったことがわかります。島内でも4メートルから29メートル

の崩壊が随所で発生し、特にホテルごと飲み込まれた奥尻港地区は宿泊客を含め29名の方が犠牲となり、灯油備蓄タンクも押し潰され、灯油が流出するなどの大惨事を招きました。津波は来襲を繰り返しながら長時間継続し、地域によっては、第七波まであったそうです。考えられない高さの津波まであります。

議員行政視

北海道南西沖地震

平成5年7月12日午後10時17分

北海道南西沖 深さ34kmを震源とする マグニチュード7.8

地震発生と同時に起きた大津波により壊滅的な被害を受けました。

たくさんの命と平穏な暮らしを、一瞬で奪い去られてしまいました。

被害総額664億2,028万円

	平成2年度 国勢調査	平成7年度 国勢調査	平成12年度 国勢調査	平成17年度 国勢調査	平成22年度 国勢調査	平成24年度 4月1日現在
人口	4,604	4,301	3,921	3,643	3,041	3,136
世帯数	1,567	1,669	1,589	1,551	1,364	1,617

地震、津波、火災による被害状況

項目		件数	被害金額(千円)	
人的被害	死者	172		
	不明	26		
	重傷	50		
	軽傷	93		
計		341		
住家被害	全壊	棟数	437	3,909,200
		世帯数	442	
		人員	1,242	
	半壊	棟数	88	30,000
		世帯数	88	
		人員	276	
	一部破損	棟数	827	694,500
		世帯数 人員	1,126 2,256	
	床上浸水	棟数	47	101,477
		世帯数	47	
		人員	148	
	床下浸水	棟数	11	3,300
世帯数		11		
人員		38		
計		1,410 1,714 3,960	5,016,477	
公共建物、その他建物被害			114,055	
農業被害			324,311	
土木被害			32,105,167	
水産被害			6,873,853	
林業被害			15,811,958	
その他被害			5,995,460	
被害総額			66,420,277	

三、火災の概要
津波の襲来直後、難を逃れた家々に火災が発生し、見る見るうちに延焼が広まって、青苗地区の市街地を焼き尽くした。出火時間午後10時35分。鎮火時間翌13日午前9時20分頃。
罹災世帯108世帯。311名、死者2名。

四、復旧・復興の概要及び状況。
○避難状況
学校、公民館等17か所の避難所へ2,014名が避難。
○災害復興基金
全国各地から寄せられた義援金の中から、90億円を原資として「被害復

興基金」を設立した。この基金で被災者のための支援事業、様々な角度からの復興事業の助成に使用し、被災者の救済及び町全体の復興が着実に図られた。
特に住民の生活の安定住宅の確保のために、自立復興支援が有効に役立った。

最後に、飛島村の地震・津波対策には、地形・環境の違いがあり、参考にはあまりならないと思われました。





人工地盤



望海橋

視察研修を終えて

文教厚生委員

渡邊一弘

平成5年7月12日に起きた「北海道南西沖地震」により198人の犠牲者を出し壊滅的な被害にあり、5年足らずで復興を成し遂げた奥尻島へ出かけました。

飛鳥村を出て、中部国

際空港から飛行機を乗り継いで半日ほどで到着しました。

島の大きさは、東西11キロメートル、南北27キロメートル、周囲84キロメートル、面積143平方キロメートルで山林原野が9割を占める。人口は3、136人（約1、600戸）で主な産業は観光。漁業・農業で1割強ということです。

最初に津波と火災で7割の家が全半壊した、島の南部、青苗地区に向かいました。

漁港に面した展望台のような人工地盤「望海橋」に行きました。

長さ160メートル、幅30メートル。海面から7・7メートルの「望海橋」の下部、コンクリート柱の間は漁業作業場として使われ、5か所造られた階段をのぼれば、高台の避難所へと通じる立派なものでした。

27億もの事業費ででき

避難路入口



たこのことです。

住宅地から高台に通じるドーム形式でスロープの避難路。人工の階段部分が無ければ、十分に軽トラが通ることができるところでした。

次に青苗小学校に行きました。1階部は空間を用いたピロティ構造と呼ばれる高床式の校舎。グラウンドの奥、山側には避難路がありました。

人工地盤、そして校舎を見るに、現在、飛鳥村の避難計画にある、1階は空きにしてスロープでのぼるといふものと合致していると思いました。

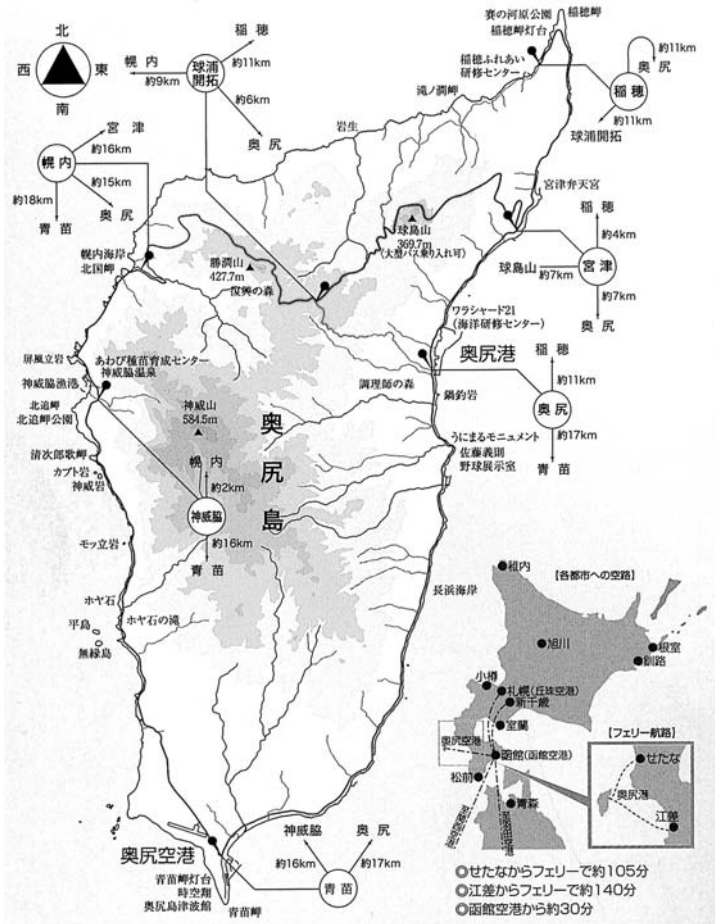
防潮堤は総延長14キロメートルで、最高12メートルのものが造られ、350億が費やされたとの



高床式の青苗小学校



スロープの避難路



津波の高さを示す

津波でさらわれた青苗地区の南端、一部区域は居住できない場所とし、大きな緑地公園をつくり、慰霊碑、奥尻津波館等が建てられていました。そこに住んでいた人々は、高台移転又は新たに盛土され、区画整理された場所に住居を構えています。住居再建の後押しをし

たのは90億円もの義援金。住宅新築者には見舞金も含め最高1、400万円が配分されました。災害時の負傷者の中には、ヘリコプターで搬送中、又搬送待ちの間に亡くなられた方も数多くみえたとのことでした。

やはりヘリポートの必要性、災害時の救急医療対策はより良くしていかなければならないと再認識させられました。そしてガレキ処理は、1か所に固めて埋め、一部は焼却し、全て島内で処理されたとのことでした。

巨額を投じて防災施設の整備をされた町を、短時間ですが見学し「災害への備えに万全無し」災害への取り組みは絶えず考えていかねばならないと思いました。



慰霊碑



高台へと続く階段